

# 橋爪さんと 日本共産党

(五〇代、男性)

## 「国民の苦難あるところに日本共産党あり」の訴えに納得

私は橋爪さんを二〇代のころからずっと見てきました。リュックを背負って新聞配達をしておられた姿も知っています。いまは、軽トラですが、これまでの活動ぶりを見ていて一番感心するのは、水害などの災害が発生すると、必ず現場にかけつけ、役場にいち早く行かれることです。これは、国民の苦難解決のために全力を尽くす、という日本共産党の立党の精神に基づいたものだとのこと。先日懇談会で初めて知り、なるほどと思いました。

## 感動した「子どもの時から思いが入党につながった」話

子ども時代からいただいていた平和への思い、貧乏生活からの解放の願いが共産党入党につながった」といつ橋爪さんの話に胸が熱くなりました。  
海軍で戦死した伯父(？)さんと東京

大空襲で行方不明になったままの伯母さん。せつない話ですね。私のまわりにはそういう人がいませんでした。でも、先の大戦に唯一、命がけで反対した共産党にほれた気持ち、わかります。

「子どものために役に立ちたい」...」の思いで

二十六年間、町議会議員としてがんばってきました。

「市政レポート(よしかわ版)」は、もうすぐ二二〇〇号を

むかえます。みんなの“幸せ”のため、ひきつぎ一生懸命がんばります。

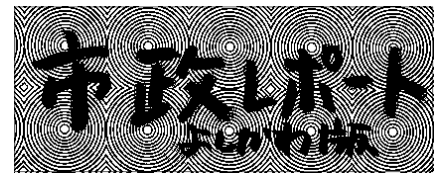


はしづめ のりかず

# 橋爪法一

### プロフィール

1950(昭和25)年尾神生まれ/新潟大学人文学部卒/1978(昭和53)年吉川町議当選、7期26年/総務文教常任委員長、まちづくり基本条例特別委員長、吉川町農業委員会会長職務代理、上越地域合併協議会委員などを歴任/現在党吉川支部長/家族:父母・妻・1女2男/著書:『幸せめつけた』(恒文社)/吉川区代石在住



2005年1月 号外  
発行: 日本共産党吉川支部  
電話548 - 3628  
有線4867

日本共産党の見解を紹介します。

### 橋爪法一はみなさんと力をあわせて頑張ります

豪雨・地震対策など、災害対策に全力をそそぎます。  
子どもの医療費助成の拡充、保育料の軽減に力をつくします。  
介護と福祉の充実めざして、がんばります。  
通園・通学バス、集団検診送迎バスは、これまでどおりの運行を求めます。  
「吉川町まちづくり基本条例」の精神を新市にひきつぎます。  
「市政レポート」を発行して、新市のことをお知らせします。



1950年

## 農家の長男として 自然ゆたかな尾神・蛭場に生まれる

橋爪法一は、尾神岳のふもと、蛭場（ほたるば）の貧しい農家：屋号は法生（ホーセ）：の長男として生まれ、ゆたかな自然のなかで成長しました。小学校高学年から田んぼを手伝い、中学校二年の時から、酪農の仕事でも汗を流してきました。

1968年

## 高田高校から、新潟大学人文学部へ

1965年、高田高校に入学して下宿住まい。高田で、初めて一人で信号機に従って国道を横断した時、「とても怖かった」といいます。進路を模索するなか68年、新潟大学人文学部へ進学。多感な青春時代、弁護士・坂東克彦氏、詩人・眞壁仁（故人）、自由民権運動研究の佐藤誠朗教授との出会いは、その後の人生に大きな影響を与えました。

## アガリ症克服へ、落語研究会で修行 高座名は「えちご亭円志」

人前で緊張する「アガリ症」を直そうと、大学で入会したのが「落語研究会」。高座に上がって演じることで、度胸をつけたいと考えました。

高座名は「えちご亭円志」。新潟市の県民会館小ホールでおこなわれた恒例の口演会では、前座をつとめる腕前だったとか...

今でも「寿限無（じゅげむ）」は暗誦できます。



これまででも、これからも  
生まれ育ったふるさとのために…

日本共産党 橋爪法一

## 農民大学に参加して ふるさとで働くことを決意

1970年代

学生時代にさそわれた「農学系セミナー」で、教員や農民の方々といっしょに泊り込みで学ぶ「山形農民大学」の存在を知り、参加しました。新しい農業のあり方、農村行政など、学者や農民の方がたと酒を酌み交わしながら討論を重ねるなか、「君のような人こそ、ぜひ農村にもどるべきだ」と、情熱的に訴えられました。このこともきっかけとなって、ふるさとで働くことを決意しました。

1978年

## 28歳で吉川町議に初当選 「町民こそ主人公」の政治実現に全力

卒業後、吉川町にもどって酪農をおこないながら、28歳のとき、町議会議員に初当選します。以来、いつでもどこでも「住民こそ主人公」の立場でがんばり続けてきました。

欠かさず発行してきた「町政レポート」（新年から「市政レポート」に改題）は、もうすぐ1200号になります。

## 橋爪さんを心から応援します

橋爪さんは力がある。上越市になり、大舞台になっても、吉川のため、また上越市のために、堂々と論陣を張られるのは、党派を超えて橋爪さんが一番だ。また、人柄もよい。

（七〇代、男性）

議会の様子や町の動きを私たちにきちんと伝えてくれるのは橋爪さんだけ、町政レポートしかないと。これからは住民に伝えてほしい。ホームページも見ています。地道な活動、すごいです。頭が下がります。

（四〇代、女性）

2000年に発行した著書、『幸せめつけた』は多くのみなさんから愛読いただいています。